

島木赤彦の満洲旅行の旅程

宮 川 康 雄

一

大正十二年の満洲すなわち中国の東北地方への旅行は、短期間のものに過ぎなかったが、島木赤彦の生涯での最も長途の旅であり、ただ一度の海外への渡航として軽視することができない。しかしながら、赤彦の歿後今日までの間における相当数にのぼる赤彦研究の論稿も、この旅行に関しては、いまだ詳しい考察を施したものが見当らない。満洲旅行の旅程については、すでに赤彦自身の記録に誤りが認められるし、それに依拠した以後の諸論考にもその誤りが踏襲されている。私の手もとには『赤彦全集』未収録の書簡の写しが保存してあるが、それによって、従来の資料では知られない旅中における赤彦の行動についても明らかにし得るところがある。一九八六年の夏、私は旧満洲の各地に旅し、赤彦の旅を追体験しようとしてみると共に、その足跡についても考証に努め、収穫を得た。このようなことから、本稿では、この赤彦の満洲旅行について、特に旅程に関することを中心として、考察を施してみたい。

赤彦が満洲に旅行したのは、大正十二年十月である。一般に満鉄と略称されている当時の日本の国策会社、南満洲鉄道株式会社の招聘に応じた講演旅行であった。満鉄は、本社の所在地である大連をはじめとして、南満洲鉄道の沿線各地に居住する在満邦人のために、文化事業の一環として、毎年内地から著名人を招いて講演会を

開催していた。赤彦はこの講演会の講師として招聘を受けたのである。この大正十二年は赤彦と共に俳人の河東碧梧桐も招かれ渡満しているが、二人は旅程を異にして満洲では顔を合わせていない。

赤彦が講師として選ばれたのは、大連に本社をもつ満洲日日新聞社に勤務していた池内赤太郎(忠義)の推薦によるものである。池内は『アララギ』の会員であり、大連にも会員がいるところから、結社の主宰者である赤彦をこのような形で呼ぶことを思いつき、満鉄に推薦したのである。

赤彦のもとに満鉄からの招聘状が届いたのは、平福百穂に宛てた赤彦の書簡などから、多分、大正十二年の九月下旬であったろうことが推測される。招聘状には、満鉄沿線の邦人の居住地何か所かで講演をしてほしい旨の依頼が記されており、条件として謝金のほか、汽車・汽船の乗車券を給付するとのことが付記されていた。

この招聘状の差出名義人については、従来、満鉄社会部長牧野虎次郎ということになっているが、これは正しくは、社会課長牧野虎次である。赤彦の書簡類にはすべて右のように記されている。

大正十二年九月は、言うまでもなく、関東大震災のおこった月であり、災害がおこって以後、赤彦は機関誌『アララギ』を継続発行させるために非常な努力をしていた。下諏訪高木の柿蔭山房と東京の発行所の間を往復しながら『アララギ』編輯の仕事に従い、原稿をかくことのほか、会員との連絡、面会、被災した同人、会員を援

助すべく義捐金を募集するなどの仕事に全力を注いでいた。招聘状が届いたのはこのようなときであったから、赤彦ははじめ、これに応ずるかどうか、相当に迷ったらしい。むろんこのような大事な時期に結社の責任者である赤彦が遠く外地へでかけることについては、他から批判を受けるおそれもあったから、それについても願慮せねばならなかったであろう。

しかし赤彦は、結局、招聘を応諾することに決めた。「夫れ程に思ひ居らざりしも」(大正二・一〇・一五 平福百穂宛書簡 全集未収録)、たびたび熱心な勧誘を受けたためとかいてはいるが、もとよりそれだけの理由で満洲まででかけることはあり得ない。それは、後に記すように、より積極的な気持をもつての決心であったのである。十月十八日か十九日に出立、遅くも三十日に帰国できるならば、どうにかやり繰りがつくと赤彦は考えたのである。

牧野虎次に宛てて応諾の返事を送った赤彦は、急拠渡満の準備にとりかかった。急な話なので洋服や靴も適当なものがなく、洋服は古着で間に合わせ、靴だけは新調することにした。洋服については汽車で乗船地の下関に行く途中、神戸駅で下車、中村憲吉と会うついでに同地の加納晧にも会い、晧から譲ってもらって着ていくことを思いついた。晧は資産家の子弟である上に背丈が赤彦と同じ位なので、その服は身に合うであろうと思ったのである。すでに十月二日には晧に宛てて、「妙な事を伺ひ上候君には流行おくれで著ないといふ洋服ありやもしあらば小生に御譲り被下間敷哉それを著て二週間位の旅に出たいかと存候今君の使用してゐるものは絶対に不可なり實は急に満鐵より講演に來いと申來り或は行かんかと思案中なり洋服新調してはたまらぬ小生如き閑人は大古もので足る故に御伺ひ申上候御笑ひ下さるべしと存候」と記した手紙を送っている。晧

からはすぐ返事があった。それには自分の洋服を貸すので、それ之間に合わせてはどうかとあった。赤彦は十一日には続いて、「冬服の事忝し御來示の通りで結構也何卒願上候カラもワイシャツも願ふ(十五でいゝ)オーバコートも願はれ候はゞ有難し無くば電報願ふこちらで作らせ候大抵十八日頃出立と思ふ靴はこちらで作らせ候丸で俄か芝居なり滑稽の極なり」とかいてはいる。これで服装についての準備は整ったのである。

赤彦が上諏訪駅を出発したのは、十月十八日である。この出発日についても、一般には十月十七日としているが、十月十五日に赤彦が加納晧に宛てた手紙に、「小生十八日午前一時半頃上諏訪出立午後二時か四時かに貴駅(神戸)著可仕候。例の件何卒願上候。」(端書 全集未収録)と記されているし、また、十七日に胡桃沢勘内宛にかいた手紙にも、「小生明朝一時半頃出立満洲へ向ひ可申候」と明記しているから、それが十八日であったことは明白である。

神戸駅に到着したのは、予定どおり、十八日の午後であった。ここであらかじめ連絡をとっておいた中村憲吉と加納晧とに会い、夜まで歓談して過ごした。当地までは羽織袴姿で着ていたのを、加納から借用した洋服に着替え、羽織と袴は加納に預けた。神戸で夕食を共にしてから、夜行列車に乗り、下関に向かった。

下関駅に到着、下車したのは、十月十九日の朝である。赤彦はそれから港に行き、釜山航路の汽船に乗船した。船が港を出帆したのは、午前十時半であった。

汽船は壱岐を過ぎ、日没前の午後五時頃に対島水道を通過したらしい。海上は穏やかで、航海が順調であったことは、対島水道を過ぎるときに平福百穂に宛てて書いた端書に、「海上好日和で海ハ疊の如くです。先程から対島連山が左手に遠く見えてゐます。ぼんやり

と沖の方が曇ってゐるため沓岐へ見えませんでした。」(全集未収録)とあり、「船室もすき／＼で昼寝しました。」(同上続き)と記しているのによつてうかがうことができる。

下関から朝鮮の釜山までは、十一時間半の航海である。釜山港に船が着き、赤彦が大陸の土に第一歩を印したのは、十九日の夜十時を過ぎてからであった。

二

赤彦が朝鮮半島の釜山上陸して以後たどつた道筋は次のごとくである。

上陸すると赤彦はすぐ、朝鮮鉄道の奉天行の汽車に乗車した。汽車は朝鮮半島を北上してやがて京城(現在、ソウル)に着いた。赤彦はここで大連の池内赤太郎に宛てて連絡の電報を打ち、自分の到着を知らせた。京城駅を過ぎてからは、もともと乗客の少なかつた赤彦の乗った車室の中は一人だけになった。「十月十九日弘暎京城にて支那官人二三下車の後車室中予一人あるのみ」と『太虚集』に収められた連作「満洲」の冒頭に詞書がある。この詞書に続いて、「汽車のなかに一人となりて我は居り遠くはろけく枯野はあらむ」の詠のあるのによつて、心細い旅を続ける赤彦の様子が察せられる。なお右の詞書に、「十月十九日弘暎」とあるのは、「十月二十日弘暎」とあるべきところを、赤彦が誤つたのである。「満洲」の連作の詞書で日付の記されているのは六か所であるが、その全てが一日ずつ前にずれた形で誤つて記されている。

新義州を過ぎ鴨緑江に架かる鉄橋を越えると満洲であるが、このころ、日没となつたらしい。満洲に入ると、日本、朝鮮との間に時差があり、満洲時間の方が一時間遅い。最初の駅安東(現在、丹東)

を過ぎ、安奉線を北上、奉天を目指すが、終点はなお遙か彼方である。「一と国の境をこえてなほ遠し雪さへみえぬいやはての山に」の作がある。奉天駅に到着したのは夜半である。ここで赤彦は、大連長春間を結ぶ連長線に乗り換え、そのまま、目的地大連に向かつて南下した。

一方、赤彦が京城で打った電報を受けとつた池内赤太郎は、赤彦を出迎えるべく二十日の夜大連駅を発ち、熊岳城駅で下車、深夜の二時を過ぎた頃に赤彦と同じ汽車に乗り込むことができたが、しかし乗客の中に赤彦の姿を探し出せないまま大連駅に帰着することになった。

大連駅近くの金州で夜が明けたらしい。「満洲」の詞書の中に、「十月二十日弘暎金州につく。」と日付の記されているのは、むしろ「十月二十一日」とあるべきところを、誤っているのである。この詞書に続けて、「ここは子規居士従軍の所なり」とあり、「枯草のをはりの磯に波寄れりここに血を吐きてつひにやみけむ」の一首の作のあるのは、このとき車窓から海岸の光景を望んだの感慨である。池内は「故先生の満洲行脚(大正一五・一〇『アララギ』「島木赤彦追悼号」)において、「北方から南行する列車が漸く金州に入らんとする手前関東州の峻嶺大和尚山の裾野に差しかかる時平坦な野を隔て金州新市街とは二十數丁を隔てた金州城の彼方に茫洋たる金州湾を望むことが出来る。凡そこの邊でのお作であらうと思つて居る。」と解説している。ただし、子規が日清戦争従軍の折略血したのは帰国の船中においてであり、金州ではなかった。それで、この作も赤彦の記憶の錯誤にもとづいて作られているのである。

大連駅に到着したのは、十月二十一日の午前八時である。諏訪を出てから四日めである。赤彦はこの日の午後、これまでの行程を振

り返ってアララギ発行所に留守を守る藤沢古実、高田浪吉と岡麓の三人に宛てて次のように到着を報知した。「信濃から丸三昼夜半汽車にのりつゞけました京城以北殊に平壤以北の荒涼たる野が頭に泌みました鴨緑江附近は山遠く野ひろく川大きくて落日が異常の感を惹きました安東以西地に雪あり奉天より乗りかへて今朝大連著」

当時、満洲在住のアララギ会員は十数名である。うち十名は、大連附近に居住していた。赤彦を晩秋の冷気が身に泌みる駅頭に出迎えたのは、満鉄社会課の橋本氏のほか、石原善吉、秦美穂、江口と子等、これらのアララギ会員であった。

さて、大連に到着した赤彦は、長途の旅を続けてきたにもかかわらず、疲れも見せず、すこぶる元氣であったようである。満鉄側によって準備されていた宿は、信濃町の花屋ホテルという旅館であったが、これに行く道も馬車には乗らず、出迎えの者といっしよに歩いた。宿に着いてからも、入浴、朝食をすませると、諏訪から持参した茶器と茶の葉とを取り出して、女中に命じて茶を淹れさせ、同座の者にふるまったり、また、震災による帝都の惨害の状況を語って聞かせたりした。

講演会の開催地については、満鉄側としてはもちろん、可能な限り多くの土地で開くことを希望していた。しかし赤彦としては、すでに述べたように、遅くも十月三十日までには帰国するつもりであったから、できるだけ数をしぼり、十日以内で終了したいと願っていた。赤彦は満洲の広大さについての認識が欠如していたから、その立てた予定は、日程をいかに切りつめても実現が不可能なのは明らかであった。そこで、世話役をしていた池内が赤彦の委嘱を受けて満鉄側と接衝し、結局、満鉄本社で一回のほか、鞍山、撫順、奉天、長春で各一回の講演をするというところで話がつき、赤彦は十月

三十日に大連港を出帆する船で帰国の途につくという事に落着いた。赤彦としては帰途も朝鮮鉄道を利用し、京城の朝鮮総督府に在職していた親友の矢島音次と会って帰国することを一応考えていたらしいが、その希望も諦めざるを得ないことになったのである。もつとも講演については、右の五回ですまなかつたことは後述するとおりである。

第一回の講演は翌日に満鉄本社で行うことが予定されており、大連に到着した二十一日の午後は時間に余裕があったので、赤彦は監部通の泰華楼という支那料理店でひらかれたアララギ会員による歓迎昼食会に出席したあと、大連駅午後一時十五分発の汽車に乗って、旅順にかけている。日露戦争の戦跡をめぐる、この地の激戦で戦歿した勇士の霊を弔うことは大陸への渡航を決めたときから目的の一つになっていたのである。日清戦争では正岡子規、日露戦争では乃木大将、森鷗外がこの地に従軍しており、これらの人物に深い敬慕の念をいだいている赤彦としては、必ず訪れねばならぬ土地であった。旅順行には、池内は身体不調で昼食会にも欠席していたので、石原、秦ら五人が随行した。

この日赤彦が廻った戦跡は、白玉山と二百三高地である。『太虚集』の「満洲」の作品の排列は、二百三高地に登ったときの次の次に白玉山の納骨堂に参拝した折の歌が続いているが、実際に廻った順序は逆で、さきに白玉山に登ったことが、随行した石原の「島木先生御来満の事ども」(大正一五・一〇『アララギ』「島木赤彦追悼号」)の中に記されている。

白玉山(海拔二四メートル)の麓には日露戦争後、桜の木を植えこんだ桜山公園がつくられていた。馬車が登る坂道の両側には成長した桜樹の葉が霜に散って、燃えるような色を見せていた。この山の

日露戦争の戦死者二万数百名の遺骨を納めた納骨堂（表忠塔）に参拝すると、赤彦たちは下山し、次に旅順駅の西方八キロほどの二百三高地へと白楊や雑木の立つ野道を馬車に揺られながら急いだ。

二百三高地は日露戦争最大の激戦地の一である。このことは、改めて筆を費やすまでもないであろう。赤彦がた山の頂に立って赤彦は四顧し、深い感動を覚えた。その感動を諸方へかき送っている。翌二十二日夜に平福百穂宛に送った端書では、「昨日は朝こよつき午後旅順に行き白玉山より二百三高地へ登り候。頂上まで夕日渤海湾へ入り餘光山の岩むらに輝きし時沈黙して乃木將軍以下当地の将卒を思ひ申候。」（全集未収録）と記している。山腹の枯草の間に、乃木將軍の一子保典少尉の墓標が寂しく立っていた。それを見て赤彦はその前に立ち脱帽して涙をおとした。「満洲」の歌の排列が道順のおりではなく、逆になったのは、このような感動の深さによるところがあるであろう。

夕陽に向かって記念撮影したが、この写真は後に『赤彦全集』第二巻の巻頭を飾ることになった。

翌十月二十二日の講演は、満鉄本社の食堂を会場として開催された。赤彦が提示していた演題が「万葉集の系統」であることは、すでに知られているとおりである。この講演の筆記は、『赤彦全集』第三巻に「万葉集の系統（講演）」として掲載されているので、それによって内容を知ることができる。すなわち全集所収の文章は、講演の筆記に赤彦が手を加えたものが後日、大連の『荒栲』という雑誌に掲載されたが、この『荒栲』所載の文章と、もとの講演の筆記とを照合し、文意不通の箇所などについて若干の調整を加えたものである。

赤彦はこれ以前、大正八年の十月に、慶応義塾の図書館で与謝野

鉄幹と共に講演をしている。このときの演題も「万葉集の系統」であった。それでいまこれら二つの講演の内容を比べてみると、話の順序や引用歌は異なるけれども、全体としてはそれほど大きな違いがない。慶応義塾における講演は、子規在世中におこった鉄幹子規不可立称論以来の、明星派の浪漫主義に対するに、万葉集尊重、写実主義の旗幟を掲げる『アララギ』を代表する立場において、赤彦が、万葉歌の系統に関する自説を力こめて説いたものであった。すなわち赤彦は、年来の持説をこの地においても繰返して、聴衆を啓蒙しようとしたのである。大連での講演の方がより内容が豊かであり、思索にいっそうの進展を認めることができる。

三

満鉄本社での講演をおえた赤彦は、その夜、大連発午後十時半の夜行列車に一人乗って、次の講演地である奉天に向けて出発している。大連から奉天までの距離は、約三九七キロである。車中で一夜を過ごして、奉天に着いたのは、翌二十三日の朝九時半頃であった。「大連より奉天まで汽車十一時間の間すべて日露戦争の跡也」（大正二・一〇・二四 藤沢実・高田浪吉宛端書）と記している。途中、車窓の外に、日露戦争の激戦地黒溝台の戦跡を望み、深い感慨を催した。「満洲」の中に、「わが村の貧しき人のはてにける枯野の面を思ひ見るわれは」の一首のあるのは、詞書によって黒溝台の戦跡を望んだ際の感慨であることが知られる。この詞書に「十月二十二日奉天に著く。」とある日付は、むしろ「十月二十三日」の誤りである。

奉天は当時の奉天省の省都、現在の遼寧省の省都瀋陽であり、古くからの全満一の都市である。清朝発祥の地として奉天城内には清

朝初期の宮殿が現存し、また郊外には往時の墳墓ものこっている。赤彦は宿である琴平町の藩陽館（現在遼寧賓館と改称された旧奉天ヤマトホテルの裏手にあった日本旅館）に到着くと、講演会は夜ひらかれることになっていたので、宿の者の案内によって、日中は驢馬のひく馬車に乗って北陵と故宮とを見物している。

北陵は、奉天駅の北方約六キロの地にある清朝第二代の太宗文皇帝の陵墓で、正しい名称は、隆業山昭陵という。境域の周囲が約八キロある規模雄大な陵墓である。奉天城内の宮殿は、金鑾殿と称し、清朝初代の太祖の時に完成をみたのを後さらに乾隆帝が大増築を加えたものである。東西一〇〇メートル、南北二六九メートルの甃壁で囲まれた中に、多くの建築物があり、清朝皇帝の勢威を今に示している。

赤彦はこれらの遺物を見物して歩き、大きな驚きを感じたらしい。多くの人にその驚きを書き送っている。たとえば、「今日郊外北陵（清朝墳墓）及び城内宮殿拝観規模の広壮なると輪奐の美なるに驚き候。」（大正二一・一〇・二三 平福百穂宛端書 全集未収録）とか、「奉天北陵はその中に一大森林を劃して規模宏壮です。樓門舎殿皆金碧をこらして古色蒼然としてあります。流石に大陸に應はしい感があります。」（大正二一・一〇・二六 宇野喜代之介・両角奈美雄宛端書 全集未収録）とかと記している。「満洲」の連作にのこされたのは、みたまの青丹瓦にふりおける霜とけがたし森深くしての一首である。赤彦はこの日、日本で新調した革靴が足になじまず痛いので、支那杓を買ひ、それに履き替えた。

この夜の講演会は、満洲における講演会のうちで最も不本意におわったものだった、といわなくてはならない。奉天在住の邦人は二万人を越えていたはずであるが、聴衆が全く集まらなかったのでは

る。赤彦は、「千人位入るべき公会堂に聴衆十人足らずなりきこれは又滑稽なり」（大正二一・一〇・二四 池内赤太郎宛端書）とかき、こうした事態をひきおこした主催者の満鉄側に対しても、「主任の人には会場で逢ひしのみなり」（前掲続き）と不満をあらわにしている。自分が講演にきたことが新聞にどのように載っているかを注意して見たらしく、どれにも掲載されていないことを知ると、「奉天の新聞のどれにも小生の来し事書いてないやうなりこれが当然にて驚くことなし」（同上）と、自嘲気味に記している。実際には赤彦の講演会の記事が新聞に載ったのであるが、島木赤彦の筆名ではなく、久保田俊彦の本名で掲載されたので、これが赤彦のことであるとわかる者が殆どなく、読者の関心を惹かなかったのであるという。この地にはアララギ会員の在住者もなく、親身に世話をする者がいなかったので、前述の事態がおこったのである。大きな会場に聴衆十人では、満鉄の担当者も、何とも挨拶の仕様がなかったであらう。

奉天は大連より北方にあり、かつ内陸部に位置するので、寒さがきびしく、前夜降雪があったが、それに続いてこの夜も降雪がみられた。「昨夜又雪降る今日天晴れて寒き事信濃の冬に等し」（大正一三・一〇・二四）と藤沢古実・高田浪吉に宛てて端書を送っている。赤彦はしかし元氣旺盛で、翌日の二十四日の午前にはすでに長春に向けて出発している。奉天から長春までは約三〇五キロ、汽車の所要時間は九時間半である。今日では切拓かれて多く畑地と化しているが、当時は一望平蕪であった曠野の中を汽車は一路北上して、吉林省に入った。公主嶺を過ぎると、まもなく南満洲鉄道最北端の駅長春である。長春駅には夕方到着したものと推測される。

赤彦は、この地で落日のあと平原の上に満月がのぼるのを望んで

ひどく感動したらしい。「奉天よりこゝまで矢張只平蕪といふ詞より外に言ひ現し方ありません。夕日が沈んで雲が異常に紅い時に東の方へ大きな丸い月が浮び出ました。それが同じ地平の上にあるのですから大きな光景です。今日は旧十五日のやうです明日撫順へ行きます。ここはもう松花江の水域です。地が大体北に傾いて居ります。」(大正二一・一〇・二四 平福百穂宛端書 全集未収録)と記している。「満洲」の中に収められた「東の月かも早き枯原のはたての雲は夕焼けにつつ」の作や、『第三赤彦童謡集』(大正一五・六 古今書院)の「高粱」などの作は、いずれもこのときの感動をもととして作られたのである。

長春での赤彦に関しては、資料となるべきものが残されておらず、殆ど知ることができない。講演会が二十四日の夜に催されたことは、翌二十五日に長春から奉天に引返す車中で辻村直宛に送った絵端書に、「どうも夜講演するゆゑハガキ書くひまがありません昼は汽車で暮してゐます」と記していることから推測することができる。奉天と同じくこの地にもアララギ会員はいなかったが、講演会は奉天のときとは違って、気持よくおえることができたらしい。大連の会員江口とり子の弟が宿を訪ねてきてくれたことも心をなごませていたのである。

長春は、満洲国の首府新京となった都市で、今は旧名に復し、当時と同じく吉林省の省都となっているが、北緯四三度五五分の地にあり北海道の旭川と同緯度なので積雪がみられた。寒さも奉天よりさらにきびしく、赤彦は風邪を引いて毛布を購った。

わが行きもいやはてしなる町寂し露西亞毛布を購ひにけり
の一首が「満洲」の連作に見られる所以である。

赤彦が撫順に行くべく、長春駅から南下する汽車に乗車したの

は、二十五日の午前十一時頃のことである。奉天駅まで引返し、下車したのは、午後八時半頃、ここで撫順支線に乗換えて二時間、撫順駅に着いたのは夜半の十一時半であったはずである。

撫順は鉱業の町である。早くに高麗人によって開始されたこの地の巨大な埋蔵量をもつ石炭の採掘は、その後、清朝末期における中国人の再開発、ロシアの極東森林会社による採掘事業の時期を経て、日露戦争後、満鉄の創立(明治四〇)をみると共に、これに引き継がれた。炭鉱の開発事業は、以来一大発展をみていたのである。

赤彦の宿泊した宿は筑紫館で、撫順第一の旅館であった。深夜に到着したので、赤彦は、その夜と翌二十六日の夜と、撫順にはあわせて二泊している。

講演会が開かれたのは、多分二十六日の夜であつたらう。会場は、小学校であつた。アララギ会員はこの地にも居住者がなかつたらしく、講演についての具体的な様子も不明であるが、赤彦は長春と同様に快く講演をすることができた、と書信に記している。

撫順で出合った人びとに赤彦はよい印象を持ったようであるが、しかし、炭鉱の町であり、歌人としての赤彦の関心をひくようなものは、殆どなかつたらしい。

赤彦は二十七日(「満洲」の詞書では「二十六日」と誤っている。)の朝、案内の人に伴われて撫順駅を発つて大連に向かった。そして途中、鞍山駅で下車した。ここがこのたびの奥地(大連附近の日本人は、内陸部をそう呼んでいた)への旅行における最後の講演地として予定されていたからである。午前十時半頃であつた。

鞍山は附近一帯に埋蔵されている豊富な鉄鉱石を採掘し、それを精錬する工業によって発達した製鉄の町であり、満鉄の拠点の一つであつたことはいうまでもない。

駅に出迎えたのは、アララギ会員が数名と矢沢邦彦であった。矢沢とは先年、矢沢が松本中学校の教師をしていたときに会ったことがあり、相互に面識ができていたので、赤彦は同地に来る前に連絡をしておいたのである。矢沢はその後満洲に渡り、当時は満鉄の経営する鞍山中学校の校長をつとめていたのである。

鞍山における赤彦の行動については、矢沢が、『アララギ』の昭和二年一月号に寄稿した「鞍山における島木氏の日」と題する一文によって、詳細に知ることができる。(矢沢の文中に、赤彦の鞍山到着を二十六日としているのは、赤彦の誤りを踏襲したものである。)

矢沢によると、講演会は当日の夜七時から小学校で催された。聴衆ははじめ三十人足らず、その後矢沢の配慮によって鞍山中学校の寄宿舎にいた生徒が二十人ほど加わって、あわせて五十人足らずであった。講演は一時間半で、八時半頃におわった。そのあと自動車で満鉄社宅に引返し、金子薫園門下の足立夫人の家で催された短歌会に出席、十時半頃同じ満鉄社宅の矢沢の家に戻った。

赤彦は講演のあとは、汽車で附近の湯岡子温泉に行つて泊ることになつてしたが、矢沢夫人が同郷の諏訪の出身であることを知つて話はずんだのと風邪気味で入浴が身体によくないところから夫妻に強く勧められるままに予定を変更して当夜は矢沢の家に一泊した。湯岡子温泉は、金朝の天会八年(一一三〇)に太宗が入浴したと伝えられる著名な温泉である。中華民国時代の軍閥奉天派の総帥であった張作霖や、満洲国皇帝溥儀も別荘を設け、その建物が現存している。温泉好きの赤彦がもし入浴していたら必ず歌作があり、「満洲」の連作に加えられたであらうと思ふと惜しい。しかし、鞍山に宿泊した二十七日の夕食後にはやはり諏訪出身で同地の住人となつていた浅輪夫妻の訪問も受けており、鞍山は、赤彦にとって

は、奥地への講演旅行の中で、とりわけ親しい土地として記憶にのこつたのである。

翌二十八日は午前十時頃の汽車で大連に戻ることになっていた。ちょうど日曜日に當つていて、矢沢が在宅したので、朝のうち二人で連れ立ってしばらく散歩を楽しんだ。満鉄社宅に隣接してゴルフ場が造成されており、なだらかなスロープが丘の上へと続いている。この枯草原を散歩したときの作が、「満洲」の中の、

庭つづき枯草原にあたる日の光こほしみ出でて歩みつ
の一首である。

鞍山から大連までは、約三〇七キロである。赤彦の乗つた汽車が大連の手前の金州まで来たとき、しかし赤彦は、大連に直行する予定を変更して、金州駅に下車せざるを得ないことになった。金州民政署長や、赤彦の昔の教え子で小学校の教員をしている者などが待ち受けていて、当地での講演を懇請したからである。この日赤彦が大連に戻るのを知つて金州駅まで出迎えた池内赤太郎は、「故先生の満洲行脚」の中にその様子を記述している。すでに講演会場も準備されており、聴衆は会場にあふれていたという。

講演の題目は、これまでと同じく、「万葉集の系統」で、講演は一時間足らずでおわつた。終了後、歓迎会に出席したが、その席には早大出身の蘭という中国人も加わつており、赤彦の所説を儒教の教えに比べて、感歎これを久しうした、と池内は記している。

一泊をすすめられたのを辞退して再び車中の人となつたときには、夜は深く、暗闇に雨が降つていた。

大連駅に下車後花屋の客となつた赤彦は、責務を果した安堵感からか、金州から同行してきた池内を相手に深夜の十二時頃まで話し、漸く床についた。

四

明くる二十九日は、帰国予定日の前日である。赤彦としては、この日一日は、奥地への講演旅行の疲れを癒すために十分な休息をとりたいからであらう。しかしこの日は、満洲滞在中で、最も忙しい日となったようである。

赤彦が奥地から戻るのを待ち兼ねるようにして、三か所から講演の依頼があった。満洲日日新聞社、大連奨学会、満洲文化協会の三か所である。やむをえず引き受けることにしたが、このすべてに應ずることは無理なので、二つに減ずるように希望し、満洲文化協会からの申込みは取り下げってもらうことで調整がついた。

大連奨学会主催の講演会は、同日の午後、常盤公園の第六小学校（後の松林小学校）で催された。この講演では赤彦は童謡に関する話をした。新聞社の方は、夜になってから通称ラジウム温泉と呼ばれていた松山台の松山閣の広間を会場として、座談会の形式で開催された。この講話は速記にとられ、後に、『赤彦全集』の第四巻に「歌道座談」として収録されることになった。赤彦がこれらの講演会及び座談会において「万葉集の系統」をテーマとしなかったのは、もちろん、大連では十月二十二日にすでにこの題目で講演をしているので、それとの重複を避けたのである。

講演会と座談会の間には赤彦は満鉄の慰労宴に招かれているほか、木魚の蒐集家として著名な竹内氏の家にも案内されたのでこの日は終日にわたってあわただしい時を過ごしたのである。

三十日は、いよいよ帰国の日である（「満洲」の詞書に「二十九日大連出帆」とあるのは、むろん誤りである）。赤彦は早朝に起床すると、短冊・色紙・半折等に揮毫し、これを当地のアララギ会員その他へ

の贈り物としてのごすことにした。

赤彦の乗った帰国の船は大阪商船の台南丸で、午前十時、大連埠頭を開帆した。見送りに満鉄の担当社員はもとよりであるが、大連在住のアララギ会員の全員が顔を揃えた。空が澄んで初冬の風が烈しく吹く朝であったという。

航海は天候に恵まれ、きわめて順調であった。

わたつみの空わたる日の沈むまで一つの船にあふこともなし

山さへも見えずなりつる海なかに心こほしく雁の行く見ゆ

これらの作は、大海のただなかを航行する船中であつての赤彦の感慨である。

黄海を航行して二昼夜の後、台南丸は下関に帰港した。

下関に着いたのは、十一月一日の正午であつた。

上陸した赤彦は、池内赤太郎に宛てて次のように書き送った。「正午十二時無事こゝにつく今回は非常に御厚意を蒙り感謝の至に堪へぬ御蔭様で満洲の大自然に面接出来ました船は無事港へつく時雨來る丁度よい具合なり無事著陸を祝するため今一ぱい飲んで顔赤くなり明日へ中村加納に逢ひ直ぐ諏訪に行き一二日で上京する今時間あるゆゑ此ハガキ一枚だけ書く諸君にハ歸宅の上出す宜しく御傳へ願ふ十一月一日午後二時十五分書く」。

山陽本線の車中で一夜を過ごした赤彦は、二日の未明、神戸駅に下車した。中村憲吉と加納暁とが駅に出迎えたのは、前もって連絡をとっておいだからである。赤彦は、旅行中着用した洋服を加納に返し、和装に改めた。洋服を脱ぐ前に撮った写真は、後に『赤彦全集』第三巻の巻頭を飾ることになった。西宮町香櫛園にあつた憲吉の家を訪い、夜の十時半まで話し、その後、汽車に乗った。柿蔭山房に帰着したのは、十一月三日の午後三時である。

五

以上が満洲旅行における赤彦の旅程の概要である。

一般に満洲における赤彦の講演は不評におわたったかのように受けとられているのではなからうか。そこで、次にそのことに関連して少しく述べておきたい。

講演が不評にあつたように思いなされることになつたのは、奉天における講演で、千人も入るべき会場に聴衆十人足らずというようなことが全集所載の赤彦自身の手紙にあることや、鞍山における講演で自発的に集まつた聴衆は三十人足らずであつたことが、矢沢邦彦の「鞍山における島木氏の日」の記録から知られるなどのことからであろう。しかし、主催者側に落度のあつた奉天を別にすれば、赤彦の講演は、邦人の少ない満洲の奥地においても、それぞれば、何十人ずつかの聴衆を集めたとみてよいのである。この数は、当時の満洲の奥地における歌人の講演としては決して少ないとはいえないのではなからうか。すなわち、講演は失敗であつたとみるべきではないのである。

赤彦の講演は、在満邦人の多く居住する大連や金州では、非常な好評をもって迎えられた。帰国を前にして赤彦は、予定外の講演を三度も余儀なくされている。池内赤太郎の「故先生の満洲行脚」によれば、十月二十八日の金州における講演会場は、「講演会主催者側ではとくに人を集めていた」というような事情もあつたとはいへ、「民政署内の俄仕立の講堂にはぎっしり一杯の聴衆が待ち構えてゐた。」という状態であつたし、また、二十九日の大連での講演も、石原善吉が「島木先生御来満の事ども」に記すところによると、「聴講者は大連の短歌に興味を有する者を殆んど網羅してゐたと云つて

いい。」という。このように予定外の講演を行い、しかも盛況であつたのは、十月二十二日に大連ではじめて行つた講演が評判を呼んでいたのである。

赤彦の講演は、じじつ、聴衆の脳裡に強い印象を残したらしい。

石原が右に続いて、「御講演は何れも尊いものであつたが就中、松山台ラヂウム温泉に於けるお話は、歌の作者として、歌道に對する先生御自身の心持につき、直接先生の御体験を引例して諄々と説かれたもので、この上なく尊く有難いものであつた。」と記したのは、『アララギ』の追悼号に寄せた手記の一節であることを考慮にいれる必要があるけれども、アララギ会員ではない矢沢もまた、鞍山での講演について、「鞍山における島木氏の日」の中で、「朴訥な中に、人を惹きつける力の強い、非常によい講演であつた」と評し、「大連の私の友達が氏の講演を評して、「たしかに此人は本物であるといふ感じがする」といつたが、誠に至言であると思つた此夜私は自分の学校の先生で数学の教師に、氏の講話を聴く様に勧めておいたのであつたが、すっかり敬服してしまつて、今に至るまで、どうかあの様な講演を今一度聴きたいものだと言語るのである。(中略)其後ある有名な俳人の來た時の事、この人も有名な人であるからと思つて、その数学の先生にすすめて傍聴させたところ、非常につまらなかつたといつて、大不平を洩されて閉口したことがある。本物に比べるとまが、ひ物はすぐ分るといふ事がよくよく立証された。」と記述しているのである。(右の「ある有名な俳人」とは、赤彦と同じく、この年満鉄の招聘を受けて渡滿し、各地を講演して廻つた河東碧梧桐を指している。)

従つて池内赤太郎が、「その眞摯なる、温情聴衆を包む底の御講演は密に招聘當局者を満悦せしめたばかりでなく全滿各地の聴衆に

多大な感動を興えたものであった。」とかいているのは、多少の誇張を含むにしても、「あとで聴衆の感激談を聞いて不参加者が口惜がったこと、一般から招聘當局者が賞讃を博したこと等はちょっと是までに例がないのである。聴衆がその透徹した論に敬服したは勿論であるがより以上先生から放射される一種崇高なるあるもの——徳風といつてもよい——に魅了せられたのであった」と記しているのは信じてよく、赤彦の講演が聴衆に相当の感動を与えたことは疑いがない。満洲での講演が赤彦自身にもまた満足のゆくものであったことは、帰郷後、平福百穂に宛てて無事帰国を知らせた端書のなかで、赤彦が、「話も思ひしよりしつくり行き満足してよしと思ひ居候。五ヶ所のが各地より不思議の懇請にて八ヶ所になり従つて豫定より三日ばかり後れ申候。」(大正二二・一一・四 全集未収録)と述べているのをみても知られるのである。

満洲への旅行は赤彦においてどのような意味をもったのであろうか。これについては、まず、後に『太虚集』に収められた「満洲」の連作の収獲を挙げなければならぬであろう。大陸の各地を遍歴した赤彦は、地相のあまりの大きさに圧倒される思いで、歌作をしようにしても手に余るものを感じて容易にとりかかることができなかった。しかし、苦吟を重ねた末について大作を完成したのである。この連作は、旅程に従つて歌が排列されており、構成の面からみると単純であるが、大陸と大海の景観を詠みこんだ歌柄の大きな作品であり、最晩年を迎える前の赤彦の円熟した歌風を示している。なお満洲旅行中の取材によつて「高梁」のごとき童謡の作品も作られており、これらも収獲の中に数えることができよう。

次に、満洲各地での講演を通して赤彦が万葉集を尊信する『アララギ』の立場と万葉集の系統に関する自説を説いて在満邦人の聴衆

を啓蒙したこと、在満のアララギ会員の多くと面接し、直接ことばを交わし得たことは、『アララギ』の主宰者としての赤彦にとつてむろんきわめて有意義なことであつた。

第三に、赤彦がこの旅行を境にして心を新たに作歌に精進するようになったことを挙げておきたい。もともと関東大震災後の繁忙のさなかにおいて遠い大陸への旅に出たのは、当時の社会の風潮を、明治以来わが国が性急に輸入し続けた西洋物質文明が弊害をあらわにしてきたものとみてそれへの批判を強めつつあつた赤彦が、この旅を契機として自身も心機一転し、新たな気持をもつて出直したいと願つたからである。赤彦は帰国後、池内赤太郎に宛てた手紙の中で、このたびの旅行によつて自分の中に新しいものが加わったにちがいないと言い、「小生も新しき境土で得た生命の新鮮さを持つて益々勉強するつもりです」(大正二二・一一・四)と意欲をみせている。その願いは叶えられたといつてよいであろう。

赤彦の満洲旅行は、このようにして短期間のうちに蒼惶として行われたものではあるが、しかし、赤彦の歌人としての道程においてそれは見過ごすことのできない意味をもつたといえるのである。本稿では従来全くとりあげられることのなかった旅程を明らかにすることに主眼をおいて叙述したので、それらについては以上にとどめておくが、いずれ関東大震災が赤彦に与えた影響とあわせて、再論する機会を得たいと思つている。